

第3章7節

里山里海と生態系の文化サービス

中村 俊彦

千葉県生物多様性センター 併任 千葉県立中央博物館

1. はじめに

人が自然の一員として生きていくためには、その生命活動のエネルギー源としての食料はもとより、衣住や燃料を賄う木材や繊維、また水や空気も必要である。食料はわずかなミネラル以外は全て生物体であり、また生命維持に欠くことのできない水や空気は他の生物・生命の活動からもたらされる。このようなさまざまな生物・生命の総体としての生物多様性、またその生命のつながる生態系がもたらす機能のもとでのみ人はいとなみを続けることができる。この生態系が人にもたらす恵みを、国連ミレニアム生態系評価（MA）では「生態系サービス」として、人の生活・生業における生物多様性と生態系のかかわり及びその重要性を提示した。

生態系サービスでは、生態系の基本となる物質生産と循環機能を「基盤サービス」とし、食料や淡水、木材等の生態系がつくる物質を「供給サービス (provisioning service)」, また生態系機能の結果としてもたらされる気候緩和や洪水防止、水質浄化等の環境を保つ作用とし

て「調整サービス (regulating service)」を提示した。さらに生態系サービスのもう一つの大きな柱として「文化サービス (cultural service)」を掲げた。生物多様性や生態系が「文化」、すなわち人の心や精神、そして日常生活とも深くかかわることを科学的論理として世界に発進した。まさにそれは生きる価値観のパラダイムシフトへの先陣である (Millennium Ecosystem Assessment, 2005)。

日本の里山・里海評価及びちばの里山里海サブグローバル評価の調査・分析のこれまでの成果をふまえ里山里海の文化と生態系サービスについて整理した。

2. 日本人にとっての里山里海

国土交通省白書 2010 に掲載された内閣府の2010年の「社会意識に関する世論調査」によると「日本人の誇りに思うこと」の第1位は「美しい自然」であった (図1)。ちなみに1982年調査での1位は「国民の勤勉さ, 才能」であり、

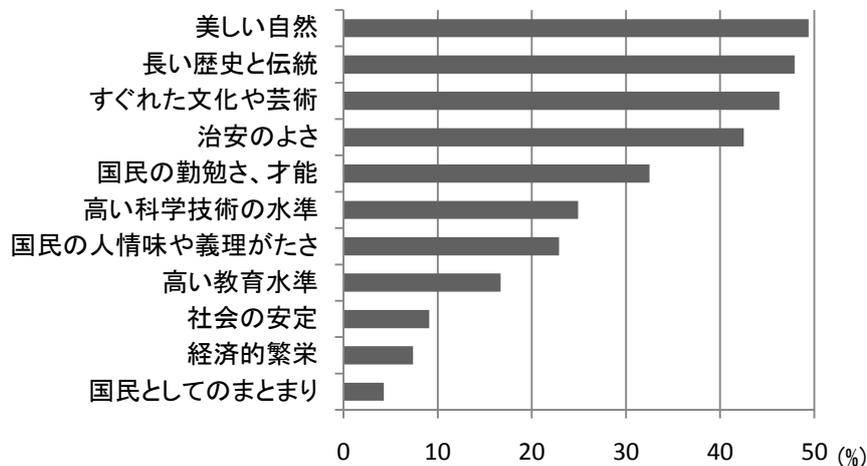


図1 日本について誇りに思うもの (資料:内閣府「社会意識に関する世論調査 2010年」より)

1989年では「治安の良さ」が1位であった(国土交通省, 2004, 2010)。しかし、現在この勤勉さや治安の良さ以上に自然を誇りに思うようになった状況は、日本人の自然に対する元々の関心の深さとともに、それを大切にしていると思われなかった思いが重なり合っているとも受け止められる。

2010年の意識調査では、日本人の誇り2位、3位はそれぞれ「長い歴史と伝統」と「すぐれた文化や芸術」であった。日本人が日々の経済活動を軸として世界の情報を追求め奔走している現実からあまりにもかけ離れているこの結果には驚くばかりである。

元来、日本列島は、北の亜寒帯から南は亜熱帯まで南北の自然の多様性ととともに標高3000m以上の山岳から海底8000m以上の深海の日本海溝まで、極めて高い自然環境及び生物多様性を有してきた。日本人はその恵みのなかで暮らし、歴史と伝統、芸術等の文化を築いてきた。

このような条件を基に人・自然・文化が一体となった里山里海での生活・生業をいとなんできた日本人は、その自然を自分たちの名前にまで取り込んできた。

静岡大学城岡研究室のHPに公開されている日本の人名に関する調査結果では、最も多い名字の文字は「田」であり、以下「野」「川」「山」「谷」「井」「木」「本」「原」「小」「大」「島」「村」「沢」「中」「岡」「崎」「藤」「上」「松」「森」等が続く。なんと自然環境、それも「田」「野」「山」「谷」「井」「木」等、ほとんどが里山里海にかかわる文字が名字に用いられているのである。いかに日本では、人と自然、そして文化とのかかわりがいかに身近で深いかが見て取れる。

3. 人と自然のかかわりにおける文化の位置づけ

国連ミレニアム生態系評価の大きな視点として、その報告書のタイトル「Ecosystems and Human Well-being」にある「human well-being」である。この日本語としては「福利」と訳す場合が多いが、文字通り「幸せに生きる」

ことにほかならない。人が幸せであるためには健康かつ安全であり、互いの信頼や生活のための必要なモノも確保しなければならない(図2)。この自然からの恵みを生態系サービスとするならば、生態系を健全に機能させ、異常な事態に対しても高い抵抗力(resistance)や回復力(resiliency)を発揮させる基が豊かな生物多様性にほかならない。

自然のリズムからはずれた現在の人社会は、自然の資源・エネルギーを大量消費し、またCO₂はじめ多くの廃物を放出してきた。これは自然破壊と環境汚染を引き起こし、自然の生物多様性と生態系に大きな負荷をかけている。この負荷は間接的には人口、経済、科学技術、政治等の社会の在りようが関係し作用している。人が生態系サービスをできるだけ多く、かつ持続的に受けるためには、まさに自然からの恵みと自然への負荷とのバランスシートが求められる。

鎖国体制のなかで自然との一体的な暮らしが術であった江戸時代までは、むしろ文化という言葉はほとんど使われなかった。文化は明治時代以降に用いられ出したが、その言葉の定義をはっきりさせたのは大正時代になってからで、ドイツ語Kulturを「文化」として用いるようになった(柳父, 1995)。クルトウール(Kultur)は英語のカルチャー(culture)「耕す」であり、これは「人が自然を耕す」を語源としている。

このように「文化」は、その起源として「人の自然とのかかわりから生じたモノ・コト」であるならば人と自然とのバランスシートの姿が「文化」としてとらえることもできる。このバランスシートとしての文化に必要とされるものが人の互いの助け合いと分かち合いの仕組みであり、その仕組みの総体を「社会」と見なすこともできる。

4. 生態系の文化サービスと人の心

人は、他の動物や植物等の多くの生物とのかかわりで生じる喜びがあり、それは自然のなかでの進化の過程で遺伝子に組み込まれた自然や

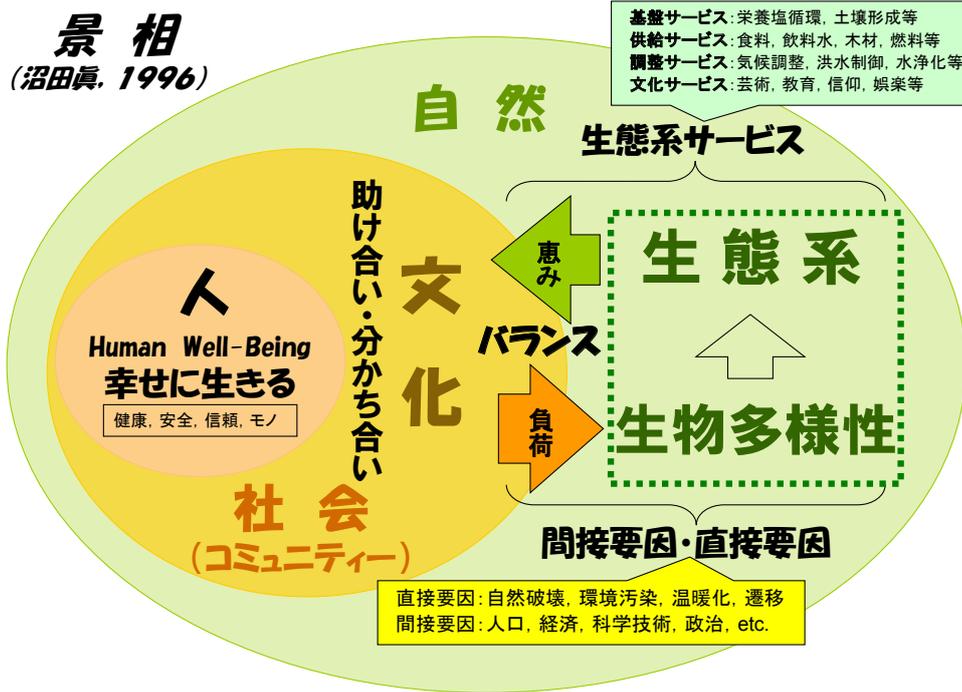


図2 人と自然とのかかわりにおける文化の位置づけと景相

生物多様性を求める欲望, すなわち「バイオフィリア」と言う概念を提唱したのはウィルソン (2008) である。

自然のなかでの体験, 特に森林の中での適度な運動は, 人の心を和ませ, 健康を取り戻す効果があり, 最近ではそのメカニズムが科学的にも解明されてきている (宮崎, 2002; 上原, 2003). 人・自然・文化の一体的な調和・共存を目指す科学として景相生態学を提唱した沼田 (1996) は, これを「五感の生態学」と表現し, 科学的事実関係の積み上げによる論理を人の感性とのかかわりからも論じようとした。

日本における人の自然とのかかわり, またその中で育まれた文化とのかかわりは年々減少してきた状況が明らかになってきた (本田, 2010). かつては子どもから大人まで, 多くの日本人は自然豊かな里山里海に暮らし, また様々な文化との体験が日常であった。しかし高度経済成長とともにモノの豊かさを追求した結果, 都市の拡大は豊かな自然環境は後退させ, 生物多様性も急速に衰退していった。特に子どもの世界では, かつての自然の中で生物・生命とのふれあい, 大勢の仲間と遊び多くの学びを

得ていた状態から, 家の中でのテレビゲームやコンピュータによる情報と仮想の中で過ごす時間が急速に増えている (梅里之朗・中村俊彦, 1997). 生命観・生命観の構築も映像中心の仮想世界での体験が中心になってきている。

「人間は長い間, 自然とのかかわりを媒介にしてつかんだことを, 精神の保護膜にしながら暮らしてきた」と述べる内山 (2005) は, 「自然とのかかわりを失った人間は自分たちを絶対視するようになり, 人間の知性に疑いをもたない個人の時代をつくった」と論じている。現在, 日本の若者の孤独感是世界各国との比較においても異常に高く (UNICEF Innocenti Research Centre, 2007), 最近では「無縁社会」といった状況は若者が中にも広がりつつある。

リチャードループ (2006) は, 最近の子どもに増えている ADHD (注意欠損多動症障害) をはじめ多くの精神的異常は, 自然とのかかわりが欠損している「自然欠損障害」が原因としている。都市化し緑地が少なく自然性の低い環境で生活する子どもたちには, 身体及び精神の不健康さが高まる状況が示されている (田中, 2005). また自然体験の少なさは道徳心や正義

感の低下ともかかわっている状況も確認されている（文部省生涯学習審議会，1999）。

都市化や近代技術の発展により身近な自然環境を後退させた結果，生態系の文化サービスは大きく損なわれ，その影響は人の精神・心の面で深刻な影響を及ぼしている。

5. 持続可能な社会への文化

日本列島の自然の地形や気候の多様性は極めて豊かな生物多様性を育んだ。これによって構築された生態系も多様かつ豊かなものであったと言える。この日本の自然は，多様で豊かな反面，台風や暴風雨による洪水や崖崩れから津波や地震，火山噴火まで，時として人々に大きな災害をもたらしてきた。このような災害は避けようとして避けられるものではなく，逃げるか，やり過ごすことしかできないものがほとんどである。ただし，そのような災害も過ぎ去れば，四季を通じまた生態系サービス大きな自然が戻って来るのも確かである。

このようなやさしさと激しさを兼ね備えた自然のなかで生きるには，その自然と対峙するのではなく，豊かな自然の時にはその恵みを得，また厳しい自然が顔を出したときに堪え忍び，時が過ぎるのを待つ。このような効率的な自然とのかかわりの手法を学び伝える手段としてもたらされた文化が「信仰」と言える。

日本人の信仰の基軸を成す，自然を畏れ敬う「畏敬」の念は，その自然のなかで最も合理的に生きる知恵と言える。信仰は，人々の助け合いと分かち合いの仕組みも育んだ。生活・生業において自然とのかかわりがその存続を支配する状況にあっては，人は個々には生きてはいけない，自然の驚異に耐え，また恵みを効果的に得るためには，人々の一体的まとまりを常に保持する必要がある。

信仰は「講」をつくり，それは互に情報交換するコミュニケーションと労働や金銭においても助け合うセーフティネットの仕組みを包含していた。土地利用においては，「入会地」の設定とそこで協働する組合も組織された。その

土地と組織でおこなわれた持続可能な資源管理とその利用は，日本の里山里海評価が提案する新たなコモンズ概念ともかさなる（中村・小島，2011）。

このような信仰は，自然の恵みに感謝し，神を喜ばず，また神の怒りを静めるための「祭り」をつくり出した。これは多くの困難に堪え忍ぶ「がまん」からの開放をとめない，楽しいレクリエーションを与えた。みんなで楽しさを共有することは，ストレスから解き放ち健康を保つ必要条件である。

自然とのより合理的なかわりを可能にする技術やシステムをも生み出し，その歴史の中の淘汰の結果は，より優秀なものを残し伝え「伝統」として，時のなかで引き継がれ更なる磨きがかけていった。

6. おわりに

人の幸せ感は絶対値ではなく変化率で示される場合が多い，どんなに大きな富をもつ人でも，小さくともその富が減少に向かえば幸せ感は損なわれ，最低の環境で生きる人が，わずかでも新たな富が加われば大きな幸せを感じる。豊かな生物多様性と健全な生態系を次の世代に引き継いでいくためには，幸せの変化率の正と負をうまくバランスさせる新たな生活・文化を創出する必要があるように思える。今の我々が「満ちたる」を知るとともに，耐え忍ぶ時期と，好転し開放される時期との両方のリズムを兼ね備えた里山里海の文化に学ぶべきものは大きい。

7. 引用文献

- 本田裕子. 2010. 里山里海の文化と生態系サービスの変遷. 千葉県生物多様性センター研究報告 2: 39-53.
- 国土交通省 (編). 2004. 平成 16 年版首都圏白書. 155pp. 国立印刷局.
- 国土交通省 (編). 2010. 国土交通白書 2010. 325pp. 日経印刷株式会社.
- Millennium Ecosystem Assessment. 2005.

- Ecosystems and Human Well-being: Synthesis. World Resources Institute. Island Press, Washington DC.
- 宮崎良文. 2002. 木と森の快適さを科学する. 171pp. 全国林業改良普及協会.
- 文部省生涯学習審議会. 1999. 生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ. 103pp. 文部省.
- 中村俊彦・小島由美. 2011. 明治時代の里山里海の「村」の構造と生産. 千葉県生物多様性センター研究報告 4 : 22-34.
- 沼田 眞 (編). 1996. 景相生態学. 178pp. 朝倉書店.
- リチャード・ループ. 2006. あなたの子どもには自然が足りない (春日井晶子: 訳). 361pp. 早川書房.
- 田中貴宏. 2005. 都市環境の人工化と生活者の健康との関係について. 日本生態学会関東地区会報 53 : 15-20.
- 上原巖. 2003. 森林療法序説. 196pp. 全国林業普及協会.
- 内山節. 2005. 「里」という思想. 218pp. 新潮社.
- 梅里之朗・中村俊彦. 1997. 日本の農村生態系の保全と復元Ⅳ: 子どもの遊び空間にはたす農村自然の役割. 国際景観生態学会日本支部会報 3(4) : 61-63.
- UNICEF Innocenti Research Centre. 2007. Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries (Report Card7). 48 pp. UNICEF.
- ウイルソン, エドワード・O. 2008. バイオフィリア: 人間と生物の絆 (狩野秀之・訳). 269pp. 筑摩書房.
- 柳父章. 1995. 一語の辞典: 文化. 97pp. 三省堂.

著者: 中村俊彦 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 千葉県立中央博物館 nakamura@chiba-muse.or.jp,
"The cultural services and the SATOYAMA-SATOUMI ecosystem." Toshihiko Nakamura, Natural History Museum and Institute,
Chiba, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan. E-mail: nakamura@chiba-muse.or.jp